

湖西運動公園内遺跡群(V) 雉子田遺跡発掘調査概報

1979

静岡県湖西市教育委員会

序 文

湖西運動公園建設に伴う埋蔵文化財発掘調査は、早や4年を経過しました。調査以前からある程度の遺跡が存在することは指摘されておりましたが、調査の進展に伴い数多くの遺物や遺構が発見されました。特に昭和52年度の第3次・第4次調査では、弥生時代の土器棺や台状墓、さらに窯業生産品の須恵器搬出の基地であったなど、数々の新しい知見を得ることができました。今回の第5次調査では住居跡と工房址が発見され、いずれも湖西地方に盛行した窯業生産と関係深いものがありました。

一方、農村基盤総合整備パイロット事業が湖西地区にも行なわれることになり、昭和52年度に分布踏査を実施しました。この結果、予定地内には相当数の埋蔵文化財が存在していることが明らかになりました。昭和53年度には総合パイロット事業が川尻地区と出入地区において施行されることとなり、川尻雉子田遺跡の発掘調査が行なわれ、古墳時代の砧、槽などの木製品が出土し、多大な成果が得られました。

これらの遺物・遺構は、湖西市の歴史を解明する手がかりを与えてくれるとともに、私達の祖先が残した貴重な文化遺産でもあります。このように発掘調査によって明らかにされる郷土の歴史は、単に学術的意義ばかりでなく、今後の市民生活に根づいた文化行政として生かして行かなければならぬと思います。

昭和54年度には東笠子土地整備事業が行なわれることを聞いております。この地区には奈良時代の古窯跡が多くあり、総合事業とともに、今後とも難しい局面が予想されます。関係諸機関とも充分協議して、慎重に対処していく所存であります。

ここに本年度分の発掘調査概要を報告するにあたり、静岡県教育委員会、浜松市立郷土博物館、湖西文化研究協議会などの関係各位のご尽力に対して深い感謝を表わすとともに、今後とも一層のご教示を賜りますようお願い申しあげます。

昭和54年3月

静岡県湖西市教育委員会

教育長 牧野治平

例　　言

1. 本書は昭和53年度に国及び県からの補助金を得て実施した湖西運動公園内遺跡群と、総合パイロット事業・雉子田遺跡埋蔵文化財発掘調査の概報である。
2. 発掘調査は静岡県教育委員会の指導のもとに湖西市教育委員会が実施した。
3. 付載として、昭和52年度に行なった総合整備パイロット事業予定地内分布調査の結果を掲載した。
4. 調査資料の整理及び本書の執筆と編集は、湖西市教育委員会の鶴竹秋が行なった。
5. 遺構の写真撮影は鶴竹秋と石田正志が行ない、遺物図版写真は石田正志の撮影によるものである。
6. 調査による資料はすべて湖西市教育委員会で保管している。
7. 発掘調査体制は次のとおりである。

調査主体者 牧野治平（湖西市教育委員会教育長）

調査員 鶴竹秋（湖西市教育委員会・日本考古学協会員）・寺田義昭
(静岡大学教育学部付属浜松中学校・日本考古学協会員)

調査補助員 鈴木敏則（奈良教育大学生）・尾崎匡則（上武大学生）

参加者 夏目武男・小池庄太郎・加藤明・加藤松男・吉田文吉・
吉田安吉・柴田荒吉・佐原庄吉

事務局 井上佳男・石田正志（湖西市教育委員会社会教育課）

目 次

I 湖西運動公園内遺跡群と雉子田遺跡の環境	(1)
1. 地理的環境	(1)
2. 歴史的環境	(2)
II 湖西運動公園内遺跡群	(4)
1. 調査に至る経過	(4)
2. 遺構	(6)
3. 出土遺物	(10)
4. まとめ	(14)
III 雉子田遺跡	(15)
1. 調査の経過	(15)
2. 調査の概要	(15)
3. 出土遺物	(18)
4. まとめ	(23)
付載 総合整備バイロット予定地内分布調査	(24)

挿 図 目 次

第 1 図 遺跡位置および周辺遺跡分布図	(1)
第 2 図 湖西運動公園内遺跡群全体図	(5)
第 3 図 遺構F実測図	(7)
第 4 図 遺構G(住居跡)実測図	(8)
第 5 図 遺構H実測図	(9)
第 6 図 出土遺物実測図(I)	(11)
第 7 図 出土遺物実測図(II)	(12)
第 8 図 出土遺物実測図III	(13)
第 9 図 雉子田遺跡地形図及び発掘区	(16)
第 10 図 e-1区土層断面図	(17)
第 11 図 遺構実測図	(18)
第 12 図 井戸状遺構実測図	(19)
第 13 図 出土遺物(土器)	(20)
第 14 図 出土遺物(木器)	(21)
第 15 図 出土遺物(瓦)	(22)
第 16 図 総合整備バイロット事業予定地区	(25)

第 17 図 中村遺跡出土土器拓影	(26)
第 18 図 中村遺跡出土遺物	(27)
第 19 図 山口遺跡出土土器	(28)

図 版 目 次

図版 1 湖西運動公園内遺跡群	A 遺構 F (工房址) (西から)
	B 遺構 G (住居跡) (南から)
図版 2 湖西運動公園内遺跡群	A 遺構 G (住居跡) (西から)
	B 遺構 H (北から)
図版 3 猪子田遺跡	A 遺跡近景 (北から)
	B 槽状遺構 (南から)
図版 4 猪子田遺跡	A 発掘区近景 (北から)
	B 槽出土状態 (南から)
図版 5 猪子田遺跡	A 井戸状遺構 (西から)
	B 砧・洗濯板出土状態 (西から)
図版 6 猪子田遺跡	A 槽 B 砧 C 曲物 D 砧

大 目 項 判

I 湖西運動公園内遺跡群と雉子田遺跡の環境

1. 地理的環境

静岡県の浜名湖西岸に位置する湖西市の地形は、北西部の山塊、南東部にひろがる洪積台地と丘陵、そして、沖積地とに大別できる。

静岡県と愛知県との県境をなす弓張山脈は、秩父古生層で構成されている標高500m以下の一低い山脈である。湖西市神座から豊橋市二川にかけての地区で、洪積台地に接して終っている。

山地南側に展開する洪積台地は、高師原・天伯原・新所原と呼ばれている。これらの台地の南側は



1. 湖西運動公園内遺跡群
2. 伊賀谷 I 遺跡
3. お経塚古墳
4. 中村遺跡
5. 五反田遺跡
6. 市場貝塚
7. 市場南遺跡
8. 雉子田遺跡
9. 川尻遺跡
10. 中瀬木橋遺跡
11. 山口遺跡
12. 町ノ坪遺跡
13. 岡崎東遺跡
14. 岡崎小学校東遺跡
15. 藤ヶ池遺跡
16. 上ノ原 I 遺跡
17. 四国原遺跡

第1図 遺跡位置および周辺遺跡分布図（縮尺1：2500）

遠州灘に面し、標高7.5m内外の海蝕崖をなしている。台地はさらに東に延びて、上ノ原・笠子原・高師山と呼ばれる丘陵になっている。南東部の丘陵地帯は、浜名湖に注ぐ笠子川、一ノ宮川、古見川、横須賀川などの河川によって侵食され、南北に細長い丘陵地形を呈している。各丘陵はさらに小丘陵に分かれて樹枝状になっている。そして、それらの小丘陵の両斜面に、古墳時代後期から奈良時代、および平安時代後期から鎌倉時代の古窯が構築されている。丘陵には松や雜木が茂り、驚神泥層に含まれる白粘土層も露頭し、窯の築かれる良好な条件となっている。

湖西運動公園内遺跡群は、こうした丘陵地帯のはば中央部で、笠子川の形成する沖積地に接する所に位置する。遺跡付近でも小侵蝕谷が発達し、東側から入り込む侵蝕谷の谷頭には湧水点があったという。丘陵地帯は標高4.5m内外で、西側は上ノ原台地から続いているのでかなり平坦である。

湖西市の自然地形の第3の特徴は、洪積世の丘陵間に堆積した低地帯である。

湖西市町ノ坪遺跡（第1図-12）のボーリング資料によると、沖積世の堆積土層の形成は、次のようになされたようである。

沖積世の海水準上昇が、最も顕著であった時期は、約1万年前から5000年ぐらいである。いわゆる繩文海進時に、現在の平野の奥部まで侵入した海面底に、三角州底置層として沈殿したシルト・粘土層が地表下4.60mにみられる。そして海面の上昇が停滞すると、次に河川の堆積作用が一方的に進行し、海面を埋積していくようになった。この時の河川堆積層が「上部砂層」と呼ばれているものである。地表下2.80m以上にみられる。この堆積は、大部分が繩文時代中期から後期にかけて完了していたようである。浜名湖沿岸における人間の活動は、この「上部砂層」が堆積してから後と考えてよかろう。「上部砂層」をおおって、現在の沖積平野面の地形を形成する腐植物混りシルト層が厚さ2.80mで堆積している。この層が弥生時代以降の遺物包含層になっている。

笠子川の形成する沖積地に面した雉子田遺跡付近も、町ノ坪遺跡と同様な土層堆積状況を示している。ただし、雉子田遺跡では丘陵側から笠子川に向って下降する「上部砂層」が顕著にみられる。このことは、海面が繩文時代後、晩期に3m内外低下したために、上部砂層面が侵蝕作用を受けて埋積浅谷の形成がなされたことが想定される。

2. 歴史的環境

湖西市内の繩文時代の遺跡は、後期・晩期の時代になって出現する。藤ヶ池、上の原遺跡などである。いずれも台地上に占地している。これらの遺跡は隣接する愛知県の渥美半島や豊川流域の貝塚を伴う遺跡にくらべて規模も小さく、貧弱な遺跡である。こうした状態は繩文時代後期に浜名湖南部はすでに陸地化しており、貝塚が形成されにくい地形であったことや、拠点キャンプ的な遺跡であったことなどの理由によるものと思われる。

弥生時代中期になると、笠子川、一ノ宮川などの河川が形成した沖積地に接する丘陵縁部や沖積地に遺跡がみられるようになる。伊賀谷I遺跡、湖西運動公園内遺跡群D地点、川尻遺跡、岡崎東遺跡などは土器棺群による墓地である。中村遺跡は、中期の集落址として推定される遺跡である。後期になると、沖積地に進出して五反田遺跡、中瀬木南遺跡、市場南遺跡が形成される。しかし、これらの遺跡はしばしば河川の氾濫を受けたもよう、大規模な集落として発展しなかった。

古墳時代では、後期の「お経塚」と呼ばれる方墳のほか、丘陵尾根部に少數の古墳がみられるが、一般的に古墳の数は少ない。湖西運動公園より北西3kmの嵩山山麓に約50基の群集墳が築かれているところに特長がみられる。

湖西市の遺跡として、最も注目されるのは古窯跡群である。湖西市から浜名郡新居町に至る丘陵斜面に古墳時代から中世の行基焼様式にわたる数多くの古窯跡が知られている。これらの湖西古窯跡群は、第1型式後半の明通り古窯跡からはじまり、奈良時代に全盛期をむかえる遠江最大の古窯跡群となっている。こうした古窯跡群に関係するのか明らかでないが、湖西地方の丘陵頂部に須恵器と土師器の散布地が認められる。湖西運動公園内遺跡群がそれである。

なお、笠子川の形成した冲積面の南半の丘陵地帯寄りの部分に条里制遺構が見られたが、土地区画整理で消滅した。

以上、きわめて概略的に周辺の遺跡を記述してきたが、縄文時代から奈良時代までの遺物を出土する湖西運動公園内遺跡群は、この地域の歴史を解明するのに重要な遺跡といえよう。また、雉子田遺跡も今まで明らかでなかった古墳時代後期の生活跡の遺跡として、木製品の出土とともに注目しておきたい。

参考文献

井関弘太郎 1977 「地形・景観の復元」『地方史と考古学』地方史マニアル9

井関弘太郎 1977 「地形・景観の復元」『地方史と考古学』地方史マニアル9

井関弘太郎 1977 「地形・景観の復元」『地方史と考古学』地方史マニアル9

II 湖西運動公園内遺跡群

1. 調査に至る経過

湖西市では、市民が「働きやすく、住みやすい」新都市計画の一環として、岡崎上ノ原地区に湖西運動公園建設工事を進めてきた。ところが、昭和49年度の造成工事で、丘陵の平坦地や斜面からかなりの須恵器片が採集された。新発見の遺跡となったわけである。

昭和50年8月に湖西市教育委員会の依頼によって、浜松市郷土博物館の向坂鋼二・辰巳均氏らの踏査が行われ、繩文時代晚期から奈良時代までの遺物が採集されたことにより、それぞれの時代の遺構が埋蔵されているのではないかと推定した。そこで、湖西運動公園予定地内の遺跡を「湖西運動公園内遺跡群」と命名し、地形によって地区分けをした。谷間の水田地帯をC地区、水田北側丘陵をA地区、西側丘陵をB地区、南側丘陵をD地区とした。

踏査結果に基づいて、関係者が協議し、運動公園造成計画に従って順次年度工事予定地区を事前に調査することにした。すでにB地区において工事が半ば以上進行していたが、湖西市教育委員会が調査主体となり、発掘調査を実施した。今まで4次にわたって実施し今回が第5次調査となった。（第2図）

第1次調査

B地区の丘陵平坦部と南斜面を対象地として、遺跡の性格を把握するために、昭和50年12月14日～12月25日まで11日間発掘調査を実施した。これを第1次調査とした。

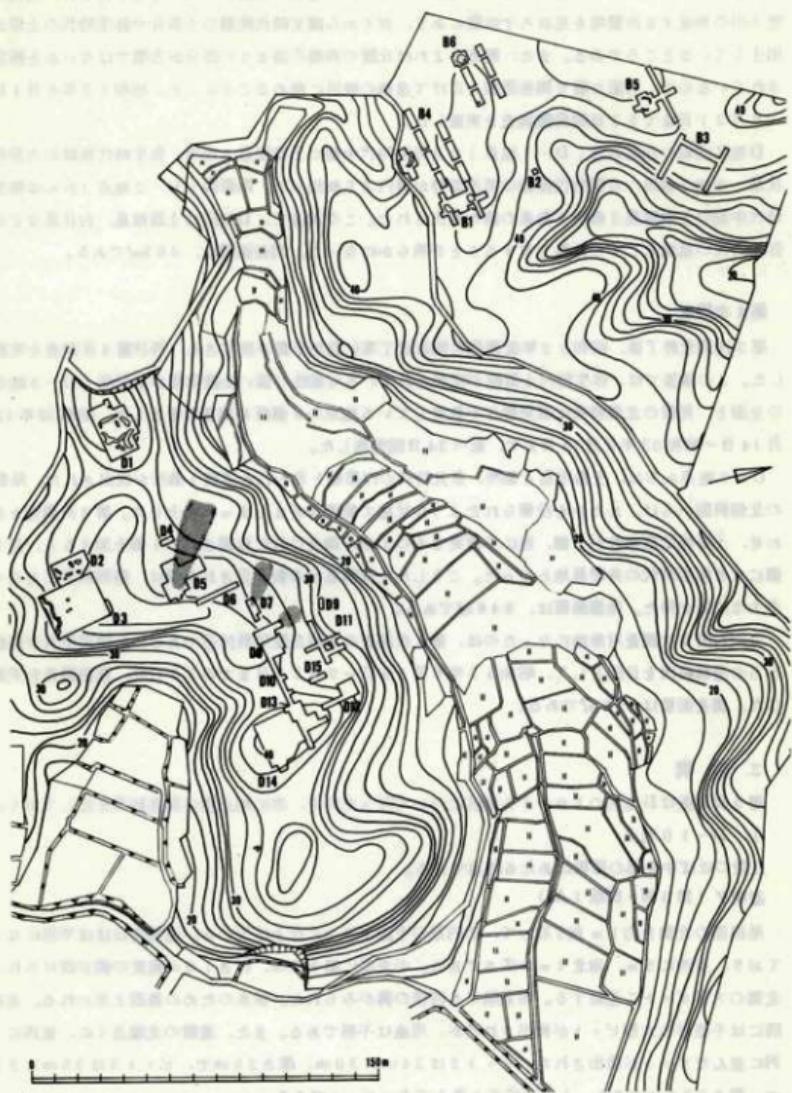
丘陵頂部の平坦地から、小形窓穴の第1号住居跡と、南斜面から灰白色粘土ブロックを含む作業場を検出した。出土遺物は古墳時代後期に始まり、奈良時代の須恵器が量的にも多かった。遺構もすべて奈良時代に相当し、湖西地方に盛行した窯業と関連する遺跡と思われたが、詳細については不明なところが多かった。発掘調査面積は 28.22 m^2 である。

第2次調査

第1次調査により、昭和51年度工事予定地内にも遺構が発見される可能性が強まり、B地点の性格を明らかにするために、昭和51年7月9日～8月14日までの28日間調査を行った。

丘陵南斜面から、奈良時代の窯業生産品を選別したと思われる作業場が検出された。丘陵平坦地からは、水神平式土器棺と奈良時代後半の第2号住居跡と、奈良時代前半の第3号住居跡が検出された。第3号住居跡はほぼ完存した形で発見され、北辺にかまどを持つ隅丸方形の窓穴住居跡であった。こうしたことから、本遺跡が須恵器生産に関わる集落址ではなかったかと判断した。しかし、奈良時代の窯跡の未確認、須恵器の製作地点と古窯との位置関係、窯出し後の失敗作のステラへの投棄以後の第2次製品選別の必要性など、まだ不明の点が多くあった。調査面積は 54.7 m^2 である。

第3次調査



第2図 湖西運動公園内遺跡群全体図

調査対象となったのは、南側丘陵のD地区であった。D地区の丘陵は不二山とも呼称され、南側に笠子川の形成する冲積地を見おろす位置にあり、古くから弥生時代晩期の土器片や弥生時代の土器が出土しているところである。また、踏査によれば丘陵の西端の高まりの部分が古墳ではないかと推定されているので、可能な限り調査面積を広げて遺構の検出に務めることにした。昭和52年8月1日～8月31日まで23日間発掘調査を実施した。

D地区西端の丘陵頂部(D-1地点)より弥生時代中期の土器棺墓1個所、弥生時代後期の方形台状墓、土壙2個所、古墳時代後期の須恵器群が溝内より検出した。西斜面(D-2地点)からは弥生時代中期の土器棺墓2個所と数条の溝が検出された。この調査で、D地区は土器棺墓、台状墓などの弥生時代の墓地としての性格を有することが明らかになった。調査面積は、463m²である。

第4次調査

第3次調査終了後、昭和52年度運動公園造成工事に追加予算が決定され、再び第4次調査を実施した。この調査では、弥生時代土器棺が埋葬されている可能性の強い丘陵頂部の南斜面(D-3地点)の全面と、尾根の北側斜面に須恵器片が散在している地点の6箇所を調査対象とした。昭和52年12月14日～昭和53年2月14日まで、延べ34日間実施した。

D-3地点からは、土器棺墓4個所、奈良時代の作業場と思われる遺構1箇所が検出された。尾根の北側斜面からは、あたかも投棄されたような状態で須恵器がまとまって出土した。第3次調査とあわせ、土器棺の墓壙数が7個、他に不確実なもの1個と調査以前に盗掘された1個を加えると、計9個になる弥生時代の共同墓地となった。こうした土器棺墓が多数発見された例は、静岡県下にもなく多大な成果を得た。発掘面積は、848m²である。

今回の第5次調査対象地になったのは、第4次調査の東側丘陵尾根付近である。丘陵頂部及び尾根からの遺構検出を目的として、昭和53年6月19日～9月27日までの25日間、発掘調査を実施した。調査面積は856m²である。

2. 遺構

第5次調査はD地区の10～15地区について行ったので、次に地点別の調査結果を記しておく。

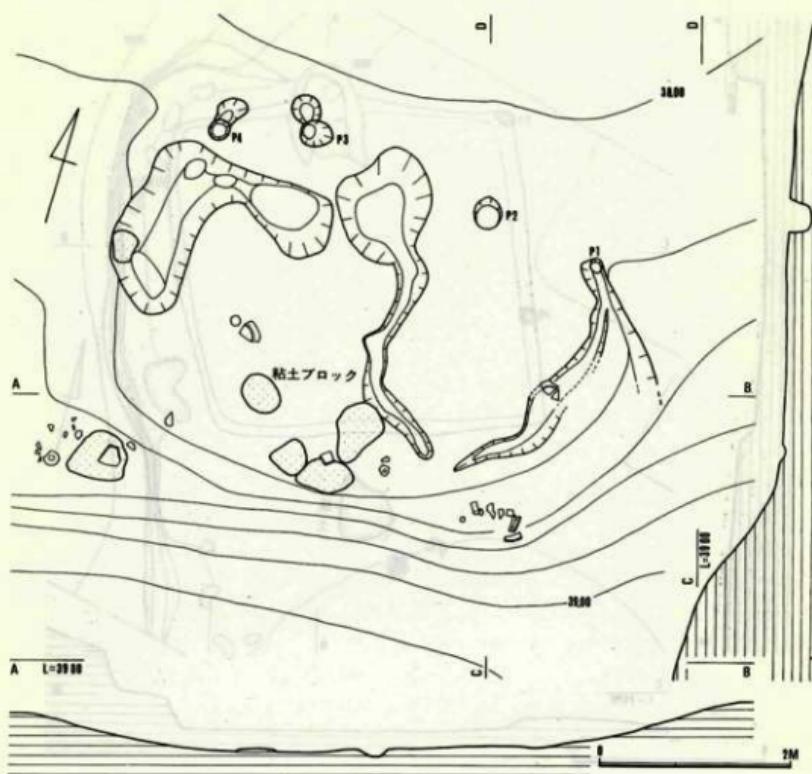
(1) D-10地点

丘陵のほぼ中央部の尾根にある地点である。

遺構F(第3図・図版1A)

尾根部の北側を約1m削り取って、半円形の平面プランに仕上げている。遺構面はほぼ平坦になってしまおり、東西に5m、南北4mの広さである。中央部に幅30cm、深さ10cm程度の溝が設けられ、北側の大形ピットに連絡する。南東隅にも同様の溝がみられた。排水のための施設と思われる。北西隅には不整形の大形ピットが検出されたが、用途は不明である。また、遺構の北端近くに、東西に一列に並んだピットが検出された。ピット2は34cm×30cm、深さ25cmで、ピット3は35cm×27cm、深さ22.5cmである。とともに柱穴と考えてよいピットである。

遺構内から、厚さ3～5cmの白粘土ブロックが5箇所と、西側の出入口に利用したと思われる地点



第3図 遺構F実測図

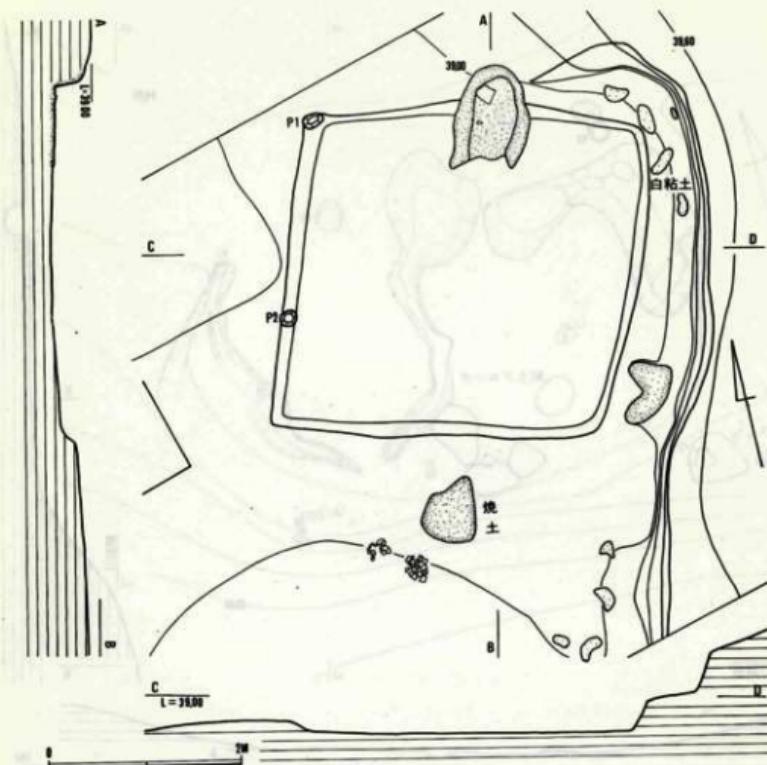
の南側に1個所の計6個所から検出された。遺物は大形の壺、蓋坏、高台等が出土した。完成品がないので明らかでないが、奈良時代前半に相当する時期であると考える。

(2) D-11地点

丘陵尾根より、一段下がった平坦地の地点である。全般的に粘土質の黄褐色土層が谷間へ流れていることが土層断面から観察できた。基盤である黄褐色細緻層上部に、厚さ8cm~10cmで幅1m、長さ5.35mの帯状の灰層が検出された。灰層内及び、トレーナー内から遺物はほとんど出土しなかった。

(3) D-12地点

北側に伸びる支丘の末端部がやや平坦になっていた地点である。古墳時代N期の須恵器と奈良時代の須恵器が混在していた。また、土師器壺が、幅75cm、深さ55cmのビットの上部から出土し、付近



第4図 遺構G(住居跡)実測図

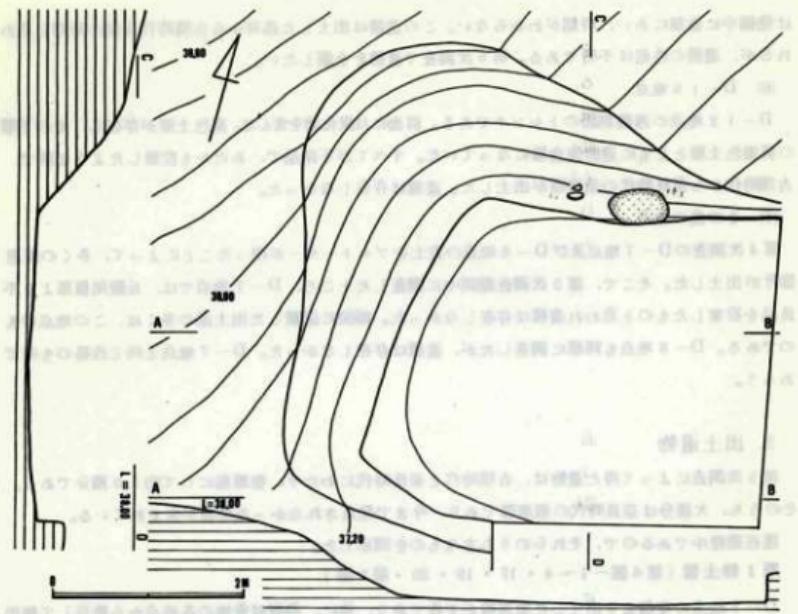
に少量の焼土がみられた。

(4) D-13地点

今回の調査で最も高い丘陵の頂部付近である。中央部に、長さ3.6m、幅3mの不整形をした大形ピットの内部から、炭素物を含んで固く焼き締まった焼土のブロックが検出された。焼土内から土器の壺、壺、壺が発見されたが、土器の復元がなされていないので時期は不明である。

遺構G(第4図・図版1B)

丘陵頂部の西側斜面の標高38.2m付近から、斜面を削り取って、いったん平坦地にし、そこに堅穴式住居をつくっている。東西3.72m、南北3.53mのほぼ正方形に近いプランである。北壁には「かまど」が構築してあった。かまど内から須恵器壺破片が出土した。住居跡西壁内にピットが2個所検出された。ピット1は直径15cm、長径20cm、深さ21cmである。柱穴とも考えられるが、不明である。住居跡東側の削り取ってテラス状にした所に、白色粘土が厚さ2cm~3cmで、ブロック状



第5図 遺構H実測図

になって、9個所から検出された。また、焼土1個所が同じ地点に、南側の平坦地からも50cm~60cmの幅の焼土が検出された。南側焼土付近には、土師器壺2個体の破片が発見された。

堅穴住居跡内から、蓋坏、甕等が検出されたが、破片であるので図示できない。ともに古墳時代後期の遺物である。

本遺構は堅穴住居外に陶土としての白粘土の塊りと焼土がみられるところに特徴がある。こうしたところから当地方に盛行した窯業生産に関係した住居跡と判断しておきたい。古墳時代後期の第4号住居跡とする。なお丘陵斜面から雨水が流れ込むために、その排水のための溝状遺構がつくられていたのではないかと考えて追求したが、堆積土が同系色の黄褐色土層であるために、ついに検出することができなかった。

(5) D-14 地点

丘陵頂部の南傾斜面である。焼土が2個所から発見されたが、その他の遺構は存在しなかった。

遺構H(第5図・図版2B)

今回の調査で最も高い丘陵頂部の南東傾斜面の標高38.2m付近から、斜面を削り取って窪地をつくり底面を平坦にしている。平坦部は確認されているところで、東西3.85m、南北3.20mの広さになっている。北側斜面には薄い焼土がみられ、その西側には高坏1個体と、壺1個体が検出されたが、壺

は発掘中に盗難にあい、時期がわからない。この遺構は出土した高杯から古墳時代後期の時期と思われるが、遺構の性格は不明である。第6次調査で遺構を全掘したい。

(6) D-15地点

D-12地点の西側斜面のトレンチである。斜面には炭化物を含んだ褐色土層が存在し、その下層の黄褐色土層とともに遺物包含層になっていた。すべてが不良品で、あたかも投棄したような形で、古墳時代から奈良時代の須恵器が出土した。遺構は存在しなかった。

(7) その他の地点

第4次調査のD-7地点及びD-8地点の表土をブルトローラーが削ったことによって、多くの須恵器片が出土した。そこで、第5次調査期間中に調査したところ、D-7地点では、丘陵尾根部より不良品を投棄したものと思われ遺構は存在しなかった。挿図に記載した出土品の多くは、この地点のものである。D-8地点も同様に調査したが、遺構は存在しなかった。D-7地点と同じ性格のものであろう。

3. 出土遺物

第5次調査によって得た遺物は、古墳時代と奈良時代にわたり、整理箱にして約10箱分である。そのうち、大部分は奈良時代の須恵器であり、今まで発見されなかった器種が含まれている。

現在整理中であるので、それらのうち主なものを図示した。

第I群土器(第6図-1~4・17・19・20・第8図)

D-7地点の東側より出土した須恵器が主体であり、他に、発掘対象地の各地点から散存して検出されたものである。蓋杯、高杯、壺などがある。

須恵器壺身の最大径が10cm~11cmと小形化しており、これらの土器群は遠江須恵器編年第V期にあたる。7世紀中葉のものとされている。

壺(1・2)や半球状を呈し、口径10cm前後、器高3.5cm~4cmを測る。頂部はヘラ切りをして平坦部をつくる。口縁部は内彫している。

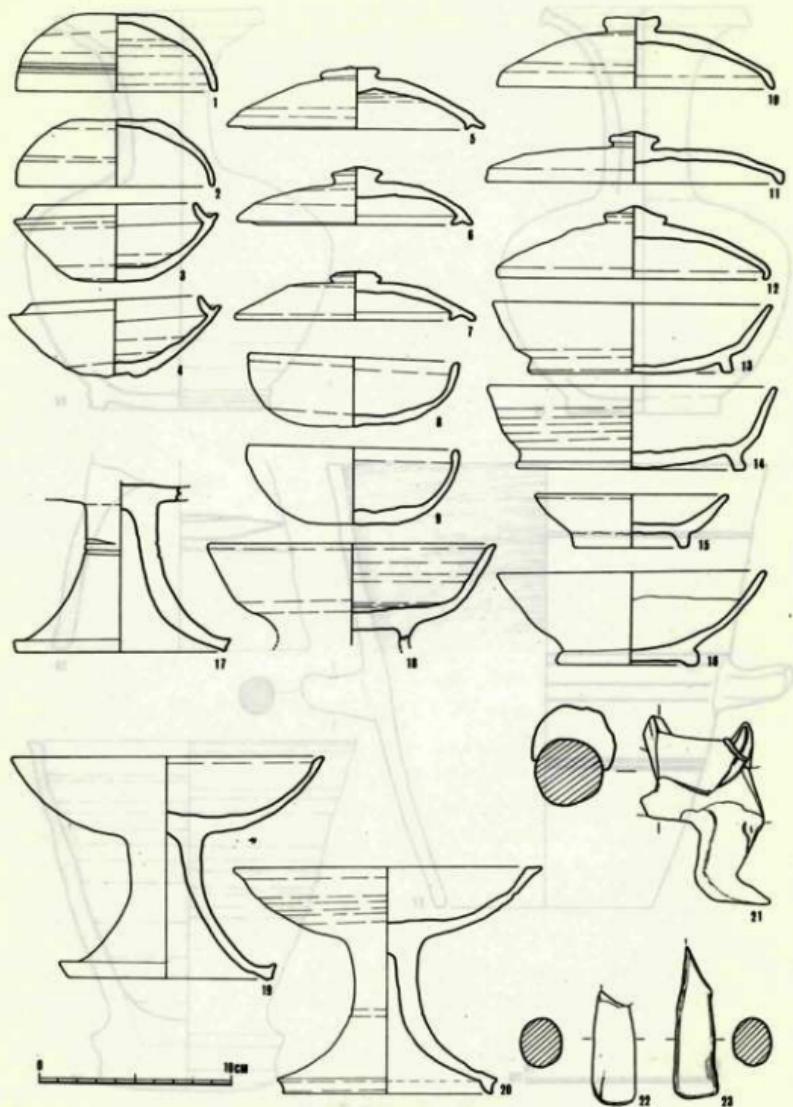
壺(3・4)口縁部内側に蓋受けがつく。小形で口径10.6~11.0cm、器高4cm、立ちあがりの高さ0.5cm前後である。底部はヘラ切りで整形している。

高杯(17・19・20)無蓋で壺部が浅く口縁が外へ大きく開くものである。口縁部を面取りしている。脚部は外へ大きく開き、裾部は段を形成する。19・20は遺構Ⅰから出土したものである。伴出遺物がないので明らかでないが、一応古墳時代後期に位置づけた。

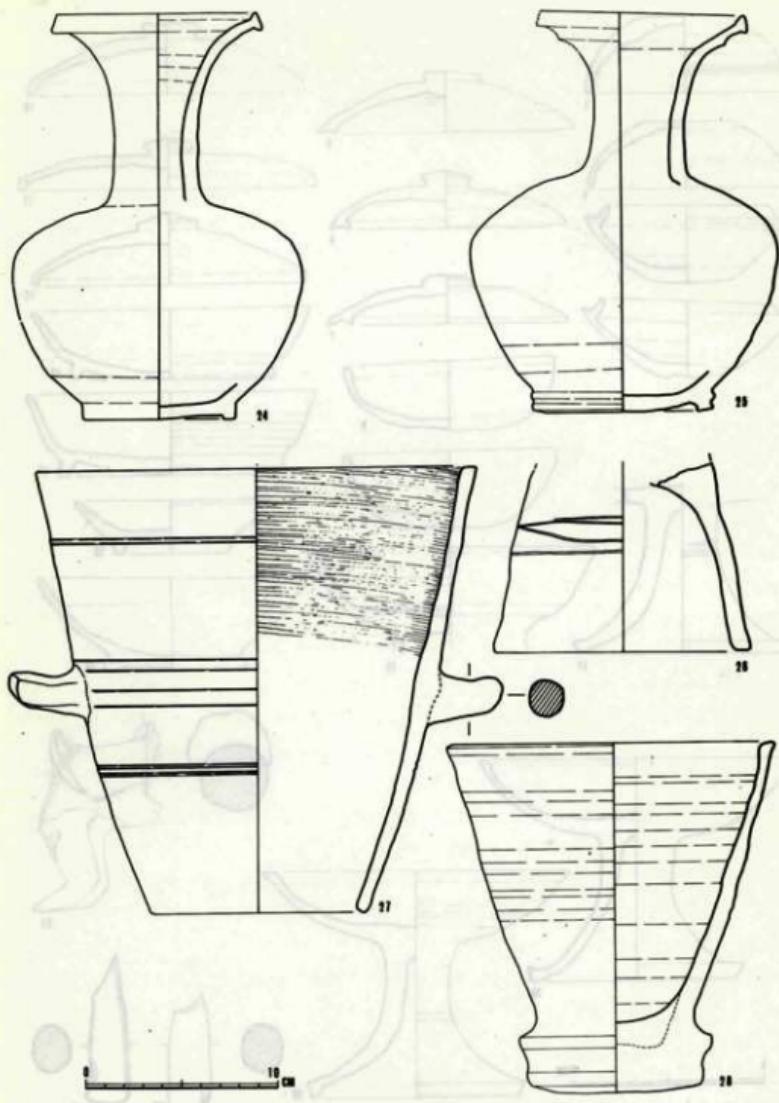
機銚(第8図)D-8地点北側より出土したものである。器表面には印き文が残り、胴部上端にボタン状の円形浮文が付加されている。焼成時における窯割れが、器面にみられるところから不良品として投棄されたものであろう。

第II群土器(第6図-5~14・18・21~23・第7図)

D-7地点東側とD-8地点南側から出土したものが大部分であり、他に丘陵の全面から検出されている。これらの須恵器群は遠江須恵器編年第V期に相当し、前半は7世紀末から8世紀前葉にあたり、後半は8世紀中葉から後葉で、中葉を中心を置くものであろう。



第6図 出土遺物実測図(I)



第7図 出土遺物実測図(II)

蓋 器形から 2

種類観察された。

A類(5~7)

口径 12.3~13.4

cm の蓋の口縁部に

身受けがつく。頂

部に遍平のボタン

状のつまみがつく。

B類(10~12)

遍平の宝珠状のつ

まみを付けた蓋で

つまみ部から口縁

部にかけてゆるや

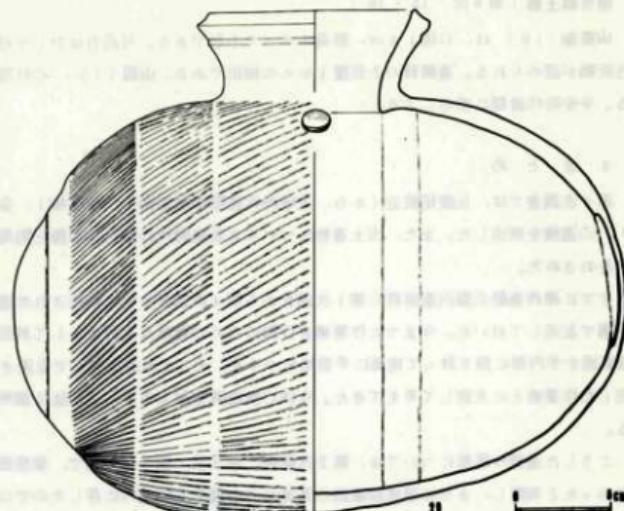
かな曲線を描き、

口縁部を折り曲げ

たものである。

坏 器形から 2

種類みられる。



第8図 出土遺物実測図(III)

A類(8~9)へラ切りした丸底の半球形をなす器形である。口径 11 cm, 器高 3.6~4 cm である。

B類(13~14)平底に高台を付け、底部が高台とほぼ同一の高さになっている。14は口径 15.1 cm, 器台 4.4 cm で大形になっている。

蓋 A類と坏 A類は同一セットになるのか現在のところ不明である。蓋 A類のみを考えれば、蓋 B類より前出するもので、7世紀末に位置づけられると思われる。蓋 B類の形態だけで奈良時代前半か後半を区別することはむずかしい。坏 B類は底部が高台よりはみ出ない点で、奈良時代後半と考えてよいものである。

高台付坏(18)遺構 Fより出土したもので、高台は欠落している。実測図から見ると、かなり高い台が付けられていたと思われる。奈良時代前半のものであろう。

その他、奈良時代前半か後半か区別することがむずかしい遺物群がある。これは丘陵斜面へ不良品として投棄したことが認められ、伴出物がよくわからないためである。今回は一括して、奈良時代の遺物として報告しておきたい。

陶馬(21~22~23)21は馬具を着装した飾馬であり、胴部のみの出土である。D-7地点東側より検出された。後足を折り曲げて、ちょうどひざまづくようになっているところが異形である。脚部の 22~23 は、21 と別個体である。

長頸壺(24~25)が出土している。24は完形品である。こしき(27)の底部に小穴が穿孔されていない。地域的特色である。すり鉢(28)も今回はじめての出土例である。他に 26 が出土しているが、器形及び用途ともよくわからない。

第三群土器（第6図-15・16）

山茶碗（16）は、口径14cm、器高4.8cmで小形である。付高台はひしやげている。器面に白色灰釉が認められる。遺構の上部覆土からの検出である。山皿（15）の付高台はしっかりとしている。平安時代後期に相当しよう。

4.まとめ

第4次調査では、丘陵尾根近くから、古墳時代後期の住居跡1、作業場1、奈良時代前半の工房跡1、の遺構を検出した。また、出土遺物についても奈良時代の新たな器種と陶馬の発見など大きな成果をおさめた。

すでに湖西運動公園内遺跡群の第1次調査から第4次調査までの検出された遺構について、調査の経過で記述しておいた。今までに作業場を作成するための簡単な工房址として利用したものと、丘陵の傾斜面を半円形に削り取って南面に平坦地をつくり、そこで本遺跡付近で生産された須恵器製品を選別した作業場とに大別して考えてきた。今回の検出例を加えると、工房址2箇所、作業場3箇所になる。

こうした遺構の性格については、第2次概報、第3次・第4次概報で、須恵器生産に関する集落址であったと判断し、さらに須恵器出の基地がこの運動公園内に存したのではないかと推定した。

しかし、工房址が存在する以上、この遺跡付近に古窯跡がなければならない。まだ未発見である。また窯出し後の失敗作のステラへの投棄以後、第2次製品の選別の必要性など、まだ不明の点が多い。今後の調査により、さらに多くの遺構が検出されるのを待ってから検討したいと思う。

一参考文献一

- 山村 宏他 1968 「遠江の須恵器生産」『古代学研究』50号
嶋 竹秋 1976・3 「湖西運動公園内遺跡群発掘調査概報」
嶋 竹秋 1976・12 「湖西運動公園内遺跡群第2次調査概報」
嶋 竹秋 1978 「湖西運動公園内遺跡群第3次・第4次調査概報」
遠江考古学研究会編 1966 「大沢・川尻古窯調査報告書」

III 猪子田遺跡

1. 調査の経過

昭和52年度に瀬西地区農村基盤総合整備パイロット事業に係わる13地区の埋蔵文化財踏査を実施した。この結果、川尻地区の小字猪子田の水田地帯から陶質土器（山茶碗）の底部が採集され、新発見の遺跡となる可能性があった。

昭和53年になり、総合整備パイロット事業がこの川尻地区に施行されることになった。計画によると、現水田面を丘陵側では、-10cm～-35cmの深さにすいて、階段状の水田に整備することであった。もし遺跡が埋没していたら破壊されることもありうるので、瀬西市教育委員会では発掘調査を実施することにした。

猪子田遺跡は、瀬西市川尻字猪子田に存する。この付近の地形は、一ノ宮川や古見川によって開拓され、川尻丘陵がほぼ南北に細長い丘陵になり、北端は沖積地に接して終っている。この丘陵先端部に川尻部落が営まれている。猪子田遺跡は、川尻丘陵がわずかに西側に張り出した先端部と水田との接点になるところに存在する。丘陵先端部の平坦地では、宅地と畑に利用され、標高5mである。水田面は標高3mから2mと笠子川に向って低くなっている。

調査方法は、トレンチ調査に主体を置き、遺構が検出されたならば、全面調査に切り変えることとした。そこでまず、調査予定地範囲内に10m×10mのグリッド網をかけた。総バ事業の測量杭を基準にして、南北の基準線を設定し、それに直交する東西の基準線をもうけた。東西線は北より、a・b・c…とし、南北線は東より0・1・2…として座標を組み、各グリッドをb-1, e-1と呼ぶようにした（第9図）。

調査は8月1日から9月5日までの22日間と、調査面積を拡げて他の遺構を発見する目的で9月25日から27日までの3日間、計25日間実施した。調査面積は430m²である。この間に浜松市立郷土博物館学芸員の辰巳均氏の応援を得た。

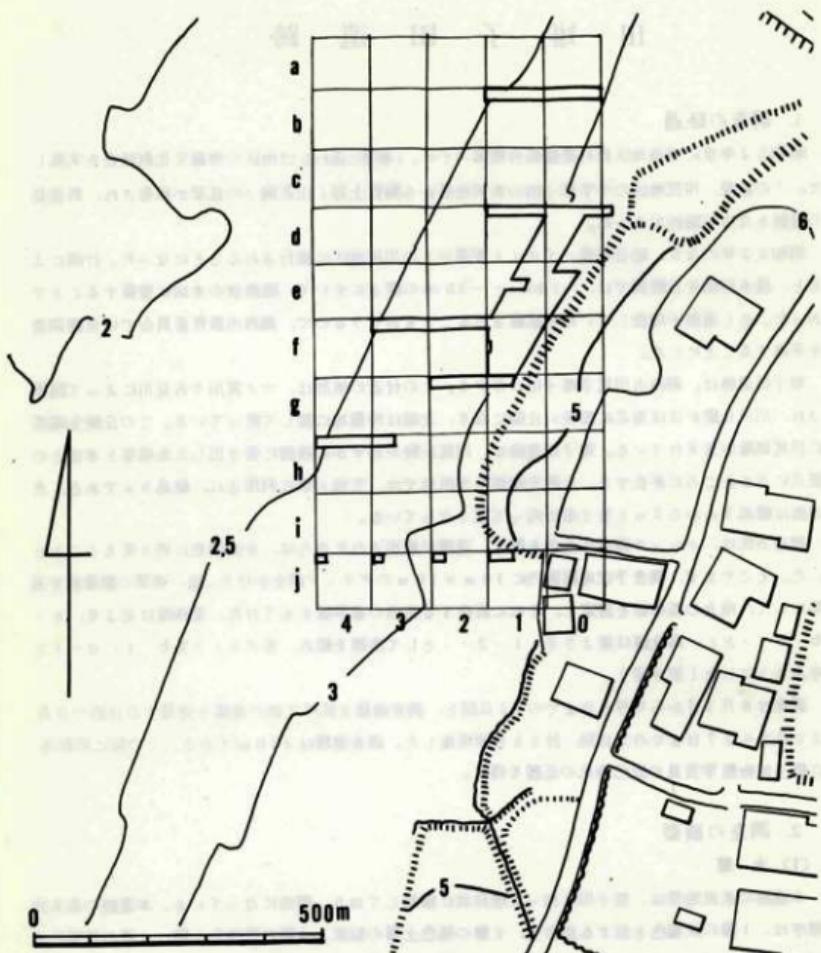
2. 調査の概要

(1) 土層

本遺跡の水田地帯は、笠子川に向って階段状に傾斜しており、深田になっている。本遺跡の基本的層序は、1層の灰褐色を呈する耕作土、2層の褐色土層の耕作土、3層の黄褐色土層、4層の黒褐色土層で部分的にビートを含む場合がある。5層の青灰色粘質砂層は基盤になっている。このうち、3層と4層が遺物包含層である。丘陵先端部の接点近くでは3層と4層内に砂層、褐色有機土層（ビート層）、黄褐色細礫層などの層がみられるようになる。

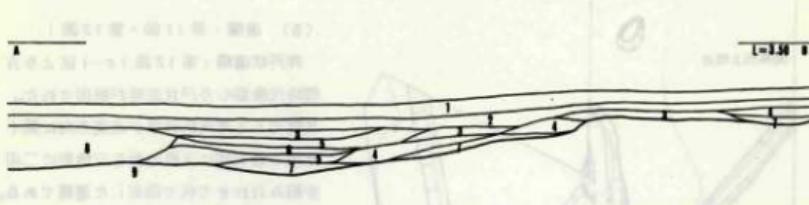
これらのこととe-1区の土層断面図から詳細に観察することにしよう（第10図）。

1・2層とも基本的層序と同じであるが、3層に黄褐色土層がみられる。この層は部分的に細礫だけになっている所があり、丘陵基盤である吉美細礫層のうちの細礫土を水田面に運んだ跡のようである。鎌倉時代の陶質土器（第13図17・18）が出土する。4層は黄褐色砂層で平安時代末期の陶質



第9図 猿子田遺跡地形図及び発掘区

土器(19)が出土する。6層が黒褐色有機土層でビートを含み、5層は間層である白灰色砂層となる。この層から部分的に奈良時代の須恵器片が検出される。さらに、7層が古墳時代後期の包含層になっており、9層の青灰色砂層の基盤となる。別地点のe-1区の中央部では4層から7層までの間に黄褐色砂層とビート層の互層が観察される。こうしたことから、丘陵末端部上面から黄褐色砂層が低湿地に流れ込み、しばらくたって、あしなどの植物が低湿地に繁ると、再び黄褐色砂層が流れ込む



1. 表土層 2. 褐色土層 3. 黄褐色砂礫層 4. 黄褐色砂層 5. 白灰色砂層 6. 黑褐色有機土層(含ビット) 7. 黑色有機土層 8. 混乱層 9. 青灰色砂層(ベース)

第10図 e-1区土層断面図

といったことをくり返していたことが推定できる。

(2) 各トレンチの状況(第9図・第11図)

b-0・1区 基盤である青灰色砂層が一ノ宮川、笠子川に向って低く傾斜しており、その上層の黒褐色有機土層から、古墳時代後期の須恵器片が少量出土する。トレント中央部に溝状遺構が検出された。

d-0・1区 3層の黄褐色砂層までは鎌倉時代の陶質土器が出土する。また布目瓦も検出された。基盤の青灰色砂層面にビット2個所が検出される。時期不明である。基盤上の礫にまじって陶馬が单独出土した。d-1区にはe-1区より続く溝状遺構がみられた。この区の遺物は、土層が搅乱されていたためか、時期が混じり合っての出土であった。なお、西側土層断面には第二次世界大戦中の暗渠排水のためのビットが検出されている。

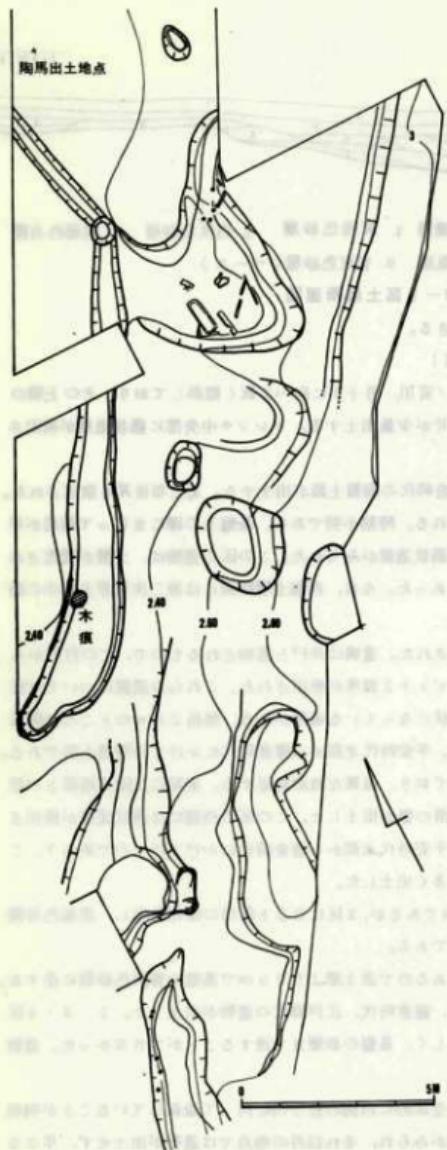
e-0・1区 古墳時代後期の遺構が検出された。遺構は井戸と認知されるもので、この付近から木製品と須恵器が出土した。他に溝状遺構とビット2個所が検出された。これらの遺構については後述する。丘陵末端部に接する水田中に、土手状になっている場所がある。標高2.8mのところで陶質土器が投棄されたようなブロックがみられた。平安時代末期から鎌倉時代にかけての陶質土器である。

f-1区 基盤がビット状や土手状になっており、複雑な地形を呈する。東端の丘陵末端部との接点となっている所のビット内から、中世の常滑の甕が出土した。この区の西側には溝状遺構が検出され、そこに5個所に杭が打ち込まれていた。平安時代末期から鎌倉時代にかけてのものであろう。この地区的表土層から口縁部を欠く陶質土器が多く出土した。

g-1・2区 1区はf-1区と同様な傾向であるが、2区になると深田の様相を示し、黒褐色有機層も厚く堆積しているが、出土遺物はわずかである。

j-1・2・3・4区 1区は丘陵寄りであるので表土層より35cmで基盤の青灰色砂層に達する。淡黒褐色土層は搅乱されていたが、奈良時代、鎌倉時代、江戸時代の遺物が出土した。2・3・4区では表土下1m以上掘り進んだが湧水がはげしく、基盤の砂層まで達することができなかった。遺物は出土しなかった。

以上の結果から、基盤である青灰色砂層が全体的に西側の笠子川に向って傾斜していることが判明した。そして丘陵末端部の水田地帯に遺構がみられ、それ以外の地点では遺物が出土せず、単なる水田地帯となっていると判断してよからう。



第11図 遺構実測図

(3) 遺構 (第11図・第12図)

井戸状遺構 (第12図)e-1区より古墳時代後期の井戸状遺構が検出された。基盤である青灰色砂層が北東方向に聞く窪地の最先端に2枚の板を三角形に二辺を組み合わせて杭で固定した遺構である。

これは最近まで湧水があった所で、井戸として使用したと考えてよい施設である。井戸付近には砧、洗濯板、曲物、槽、鑓などの木製品と須恵器が出土した。

砧と洗濯板は同じ場所に、槽は廃材となっていた釣の上部に、底を上にして出土した。このことから廃材を利用して、槽を固定してあったことが推定される。また、井戸付近はぬかるむことがあったとみて、近くの木材や廃材を足固めに利用した様子がうかがわれる。

井戸遺構の北部と西部に杭が検出されている。杭が新しいことなどから、平安時代末期から鎌倉時代にかけてのものだろう。

溝状遺構 (第11図) 溝状遺構が発掘区中心部の南部と中央部から検出された。

南部の溝は現長5.2m、幅1.4m、深さ13cmである。中央部の溝は、ほぼ南北に続き、北端近くに円形ピットが検出されて長さ17mまで確認できる。最大幅1.7m、深さ22.5cmで、北側に向うにつれて小規模となり、幅0.6m、深さ5cmになっている。また井戸遺構に続く溝も検出されている。これらの溝は丘陵裾部の水田にみられ、遺物出土状態から平安時代末期から鎌倉時代にかけて掘削されたものであろう。

3. 出土遺物

雉子田遺跡から出土した遺物は、古墳

時代後期から鎌倉時代にわたっている。それらのうち奈良時代のものは量的に少なく図示できなかった。これに江戸時代の遺物が少量加わる。整理箱にして5箱分である。また、井戸遺構付近から木製品が出土した。現在製理中であるので、それらのうち、主なものを図示する。

(1) 土器(第13図)

第I群土器(1~13) 古墳時代後期の井戸遺構周辺から出土したものである。蓋(1~6) 坏身(7)は最大径が10cm~11cmと小形のものである。坏身(8)はやや大きく、口径12.8cmで底底部(10)の中に入っ

て出土した。高坏(13)は坏部が深い。錠(9)は底部をヘラ削りしている。

第II群土器(14~16・19~23) 井戸遺構の上層及び丘陵裾部の水田地帯から出土したものである。e-1区の層序的な発掘による所見では、山茶碗(19)が第3層の黄褐色砂層より出土している。底部が糸切底で、白色の灰釉がみられる。他に山茶碗(14, 15, 16, 23)と山皿(22)は土器ブロック群から出土したもので、山皿には白色灰釉がみられる。

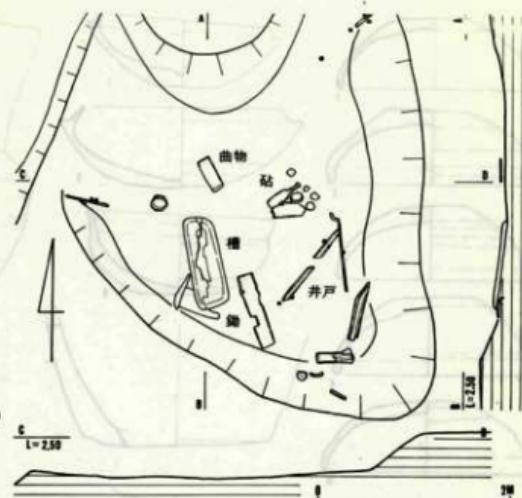
第III群土器(17・18) 山茶碗(17, 18)は2層の黄褐色土層から出土したものである。付高台にモミ痕が観察される。他に内耳鍋が出土している。

第IV群土器(25~26・28) 赤褐色の色調を呈する小皿(25, 26)は腰が張っていないで、近世のものと思われる。碗(28)は淡緑色の釉がかけられ、大皿破片とともに腹部と考えられる。他に天目茶碗が出土している。

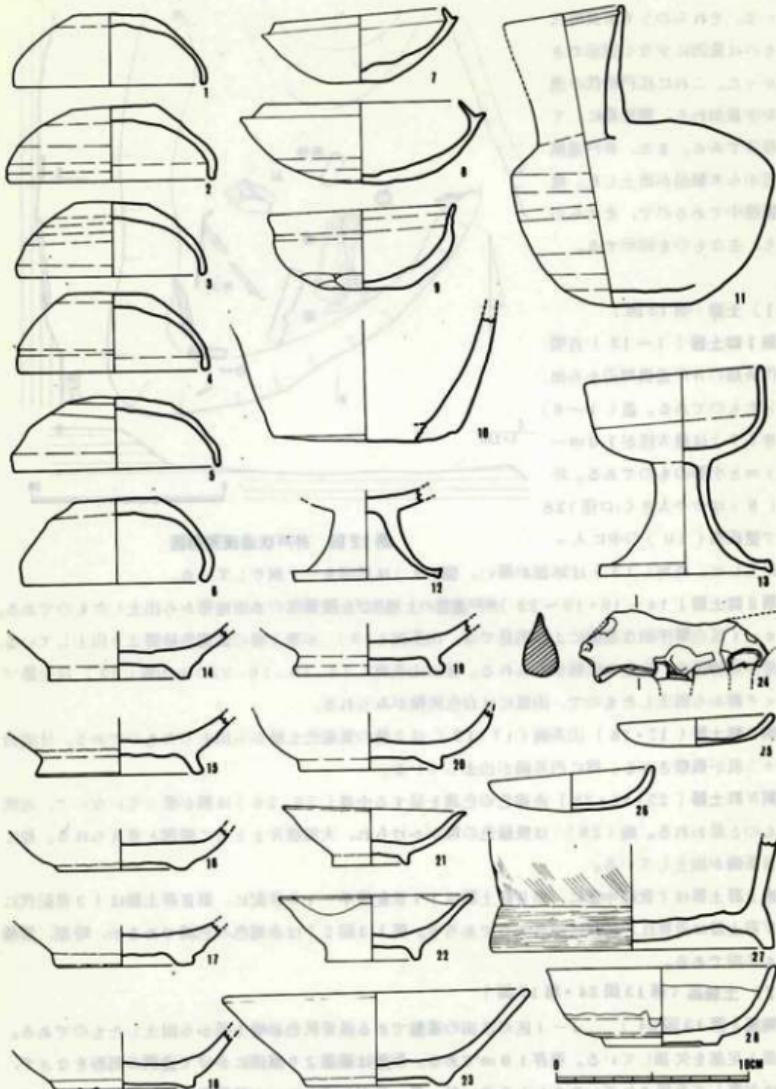
第I群土器は7世紀中葉に、第II群土器は11世紀後半~12世紀に、第III群土器は13世紀代に、第IV群土器は近世江戸時代に相当するであろう。第13図27は赤褐色の色調であるが、時期、器種とも不明である。

(2) 陶製品(第13図24~第15図)

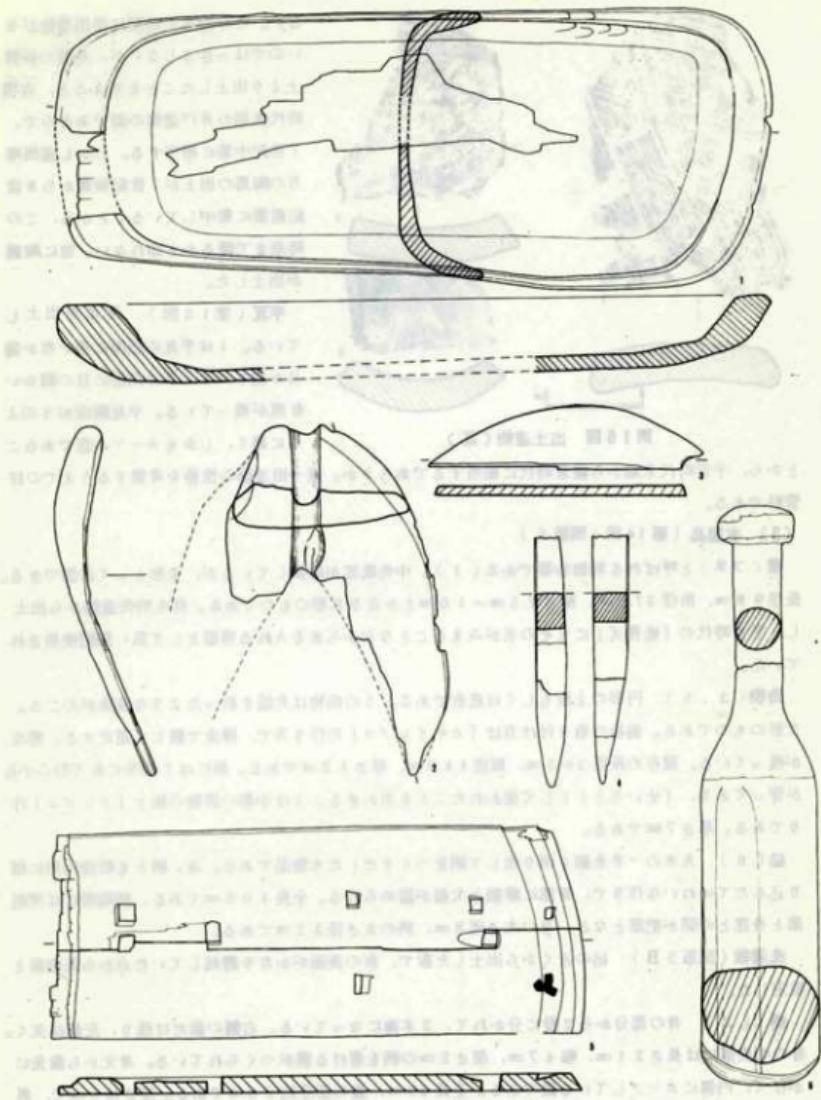
陶馬(第13図24) d-1区の水田の基盤である淡青灰色砂層上部から出土したものである。尾部と足部を欠損している。現存10cmである。形態は頭部より顎面にかけて通例の馬形をなさず、目は欠落して表現されていたかわからないが、鼻、口がわずかにヘラ状器具によって刻まれている。顎部、頭部、頸部から続いて胎土を摘み上げてたて髪を表わす手法が用いられている。馬具はみられ



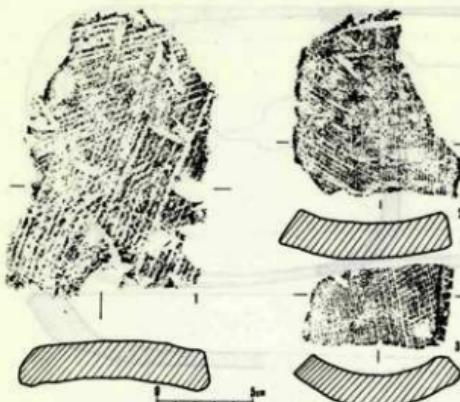
第12図 井戸状遺構実測図



第13図 出土遺物(土器)



第14図 出土遺物(木器)



第15図 出土遺物(瓦)

ない。この陶馬の時期は伴出遺物がないではっきりしないが、基盤の砂層上より出土したことを考えると、古墳時代後期の井戸遺構の面であるので、7世紀中葉に相当する。しかし遠州地方の陶馬の出土が7世紀後葉から8世紀前葉に集中していることから、この時期まで降るかも知れない。他に陶罐が出土した。

平瓦(第15図) 平瓦が出土している。1は平瓦の凸面に荒い布か織目が残り、2・3は凹面に目の細かい布痕が残っている。平瓦断面が3のように薄く、しかもカーブが急であるこ

とから、平安時代末期から鎌倉時代に相当するであろうか。雉子田遺跡の性格を考察するうえでの好資料である。

(3) 木製品(第14図・図版6)

槽(フネ)と呼ばれる刳物容器である(1)。中央底部が破損しているが、全形として計測できる。長径9.8cm、短径37.5cm、深さ7.5cm~10cmとかなり大形のものである。弥生時代遺跡から出土し、平安時代の「延喜式」にもその名がみえることなどから水を入れる容器として長い期間使用されていた。

曲物(3.5) 円形の上板もしくは底板である。5の曲物は片端を折ったような痕跡がのこる。大形のものである。側板の取り付け方は「カキイレゾコ」の作り方で、桟皮で縫じて固定する。桟皮が残っている。現存の長径36.5cm、短径14.6cm、厚さ1.2cmである。板には7個所に長方形の小孔が穿ってあり、「せいろう」として使われたことを思わせる。3は小形の曲物の板で「クレゾコ」作りである。厚さ7mmである。

砧(6) 丸木の一半を細く削り出して柄をつくりだした木製品である。身、柄とも断面円形に削り込んだいねいな作りで、身部に摩損と欠損が認められる。全長40.5cmである。柄端部には突起部と身部との間が把部となる。身の太さ径8cm、柄の太さ径3.2cmである。

洗濯板(図版5B) 砧の近くから出土した板で、板の表面がかなり磨耗していた点から洗濯板と推定した。

鋸(2) 身の部分から2股に分かれ、2本歯になっている。右側の歯だけ残り、左側は欠く。身の中央部には長さ21cm、幅4.7cm、深さ2cmの柄を着ける溝がつくられている。身元から歯先にかけて、内側にカーブしている鋸である。全長49cm、歯の部分約28cmである。厚さは5cmで、裏面はていねいに削っている。

杭(4) 断面長方形の先端部を片面からするとく削っている。その他、切り込みのある板、井戸

木の板、剣物の内面に朱、外面に黒漆をぬった椀の破片など出土した。これらの木製品の材質については、未調査なので別の機会に報告したい。以上の木製品は伴出する須恵器の年代から、7世紀中葉の頃のものである。

4. まとめ

雄子田遺跡は当初、鎌倉時代の山茶碗の散布地であったことから、古墳時代後期の遺構が存在するとは予想もしていなかった。しかも、井戸遺構と木製品は当時の生活を知るうえでの貴重な発見であった。

湧水地点を2枚の板で囲い、井戸として利用した遺構は、木製品と須恵器の出土状態から、近くの集落の女たちが集まって、洗濯や食事の調理などをした場所ではないかと推定しておきたい。

第2に、井戸遺構と集落との関係である。現在のところ、川尻地区には古墳時代後期の集落址が発見されていない。総合事業の分布踏査の結果では、雄子田遺跡近くの丘陵平坦地の畑地や宅地から時期不明の須恵器と陶質土器が採集されている。したがって、これらの地点が集落となっており、さほど遠からぬ雄子田の井戸へと足を運んだのではないかと思われる。

第3に、雄子田遺跡付近の水田開発の歴史に関するものである。井戸遺構は丘陵平坦地からの急激な黄褐色土層の流入によって埋没して使用不可能になり、木製品もこうして黒褐色土層の中に保存された。その後水位が高かったのであろう。水辺に「あし」などが繁り、また、土砂の流入が行なわれるなどして、砂とビートの互層が形成された。ところが、おそらく1世紀から12世紀、または13世紀になって、水田地帯に工事が行なわれ、丘陵裾部の水田地帯に溝が掘削され、同時に吉美細織層中の黄褐色細織が水田低湿地に運び込んで、土地改良をし、水田として利用したものと思われる。なお、笠子川の流域には条里制が施行されていたが、雄子田遺跡付近ではこれが顯著でない。それともうのも、丘陵地帯からの土砂の流入による水田面の荒廃と、鎌倉時代の土地改良工事が原因するものと思われる。

第4に、布目瓦の出土が注目される。本遺跡付近の寺院として日蓮宗妙立寺があげられる。彦坂良平氏の「妙立寺年譜」によれば、妙立寺は1386年、吉美東郷小山田に創立し、1434に愛河に転寺するとある。愛川の地名は現在残っていないが、川尻地区であることはまちがいない。布目瓦が11世紀末期から12世紀代のものと考えられるので、妙立寺との関連がつきにくい。記録に表われていない別の寺院の存在を推定するべきであろう。後考を持ちたい問題である。

付載

総合整備パイロット事業予定地内分布調査

昭和53年度より瀬西地区農村基盤総合整備パイロット事業が施行されることになった。予定地は場整備と農地開発を含めて、第16図に示した13地区である。1.大知波、2.居下前、3.入出、4.太田、5.内浦、6.前向、7.川尻、8.中村、9.山口、10.古見、11.坊瀬、12.新町、13.元町地区である。これらの予定地内の埋蔵文化財分布調査を国及び県の補助金を得て、瀬西市教育委員会では、昭和52年7月より、昭和53年の3月までの9ヶ月間実施した。この間に浜松市立郷土博物館長向板鋼二氏の指導と同学芸員辰己均氏の応援を得て、休日を返上しながらパイロット事業予定地内をくまなく調査した。

調査の方法は、予定地内を踏査し、遺物の発見と、水田地帯及び丘陵地帯では任意の地点に小グリットをあけて、遺物、遺構の検出に努めることにした。特に丘陵地帯は古窯跡が構築されている可能性が強く、未発見のものも多數あるのではないかと想定したからである。そして、少量の遺物散布地でも一応地点を記録して将来それらの地区で工事が実施される時に、トレント発掘調査の対象地とすることにした。

調査結果のうち、特に重要なと思われる遺跡について以下記述しておく。

中村遺跡（第16図8-a）

坊瀬川の西面丘陵を東笠子と呼ぶが、この丘陵が北方に伸びて、笠子川の形成した沖積地に接した先端部に位置している。県地名表では、土師・須恵器散布地として登録されている遺跡である。遺跡中心部から外れると思われる地点の丘陵中腹に試掘溝を開いたところ、弥生式土器片、須恵器片、陶質土器片等が出土した。これらの土器片は、40cm程度の黒色有機土層中より検出されたもので、弥生式土器片の包含層が確認できた。

出土遺物のうち、弥生式土器を中心に紹介しておこう（第17図）。

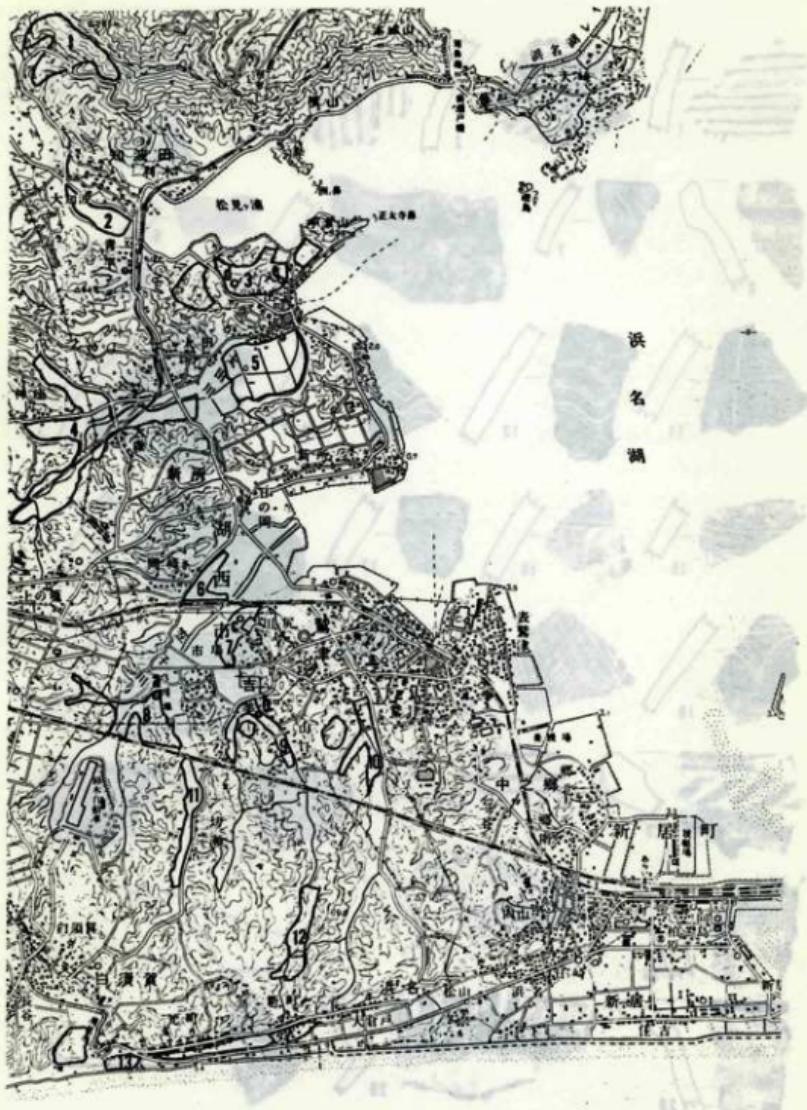
1-5は条痕文土器である。壺形土器の6-13・19-21は、弥生時代中期後葉の土器群であり、17・18は後期前半、22は後期後半の土器である。菱形土器の26-28は中期後葉で、29は明らかに後期に相当する。24は高環の口縁部のようであるがよくわからない。

その他、最下層の疊層上部から縄文時代のものと思われる石鍬2個（第18図1・2）が検出され、表土層より洪武通宝が採集された。また、丘陵東側斜面からは土師器の小形壺（第18図3）が表面採集されている。

このように中村遺跡は、範囲は不明確であるが、条痕文土器から室町時代までの遺物が検出され、その間の空白な時期はあるにしても必ず何らかの遺構が存在しているものと思われる。

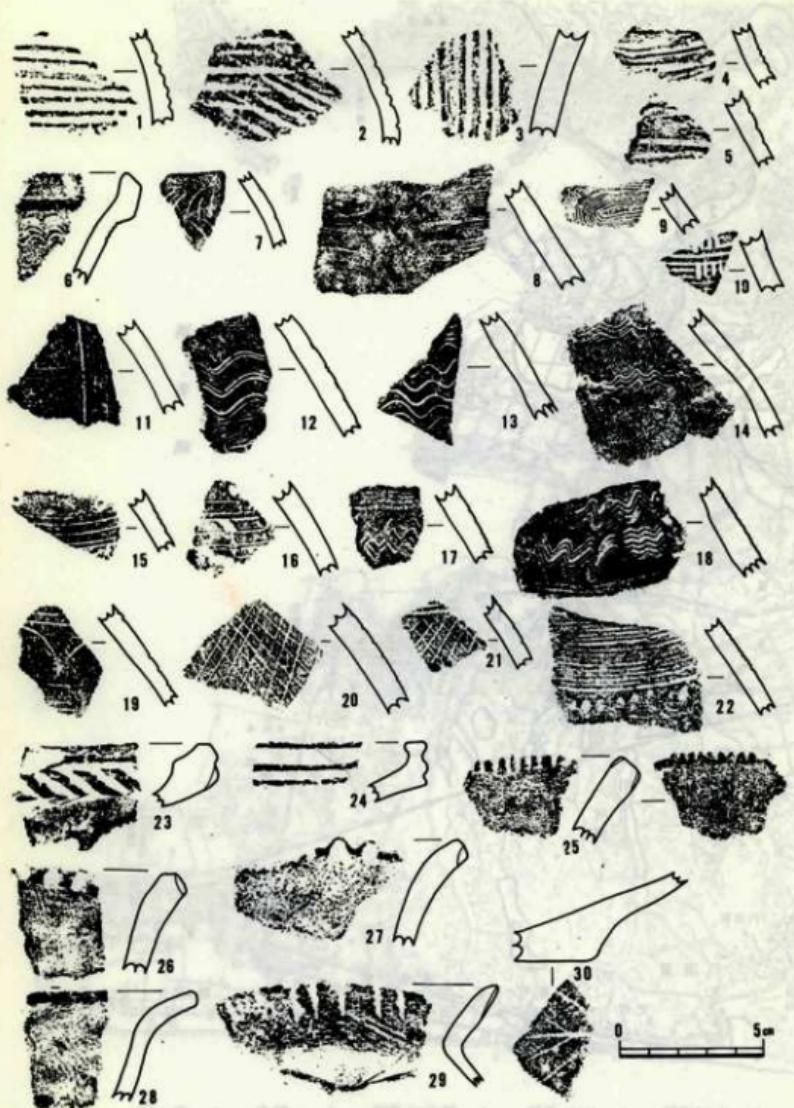
山口遺跡（第16図9-b）

山口部落の水田下に存在する新発見の遺跡である。北側の丘陵寄りの水田面に試掘溝を開いたところ、偶然に遺物が検出された。表土下30cm～40cmに上部黒色有機土層が70cm～1mのところに下部黒色有機土層がみられた。この上層と下層の黒色有機土層が遺物包含層になっていたのである。出土した須恵器について若干説明しておく。



a. 中村遺跡 b. 山口遺跡 c. 猪子田遺跡 d. 一群見 e. 西ノ谷

第16図 総合整備バイロット事業予定地区

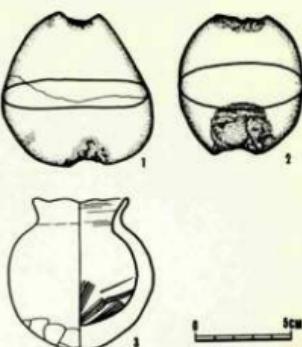


第17図 中村遺跡出土土器拓影

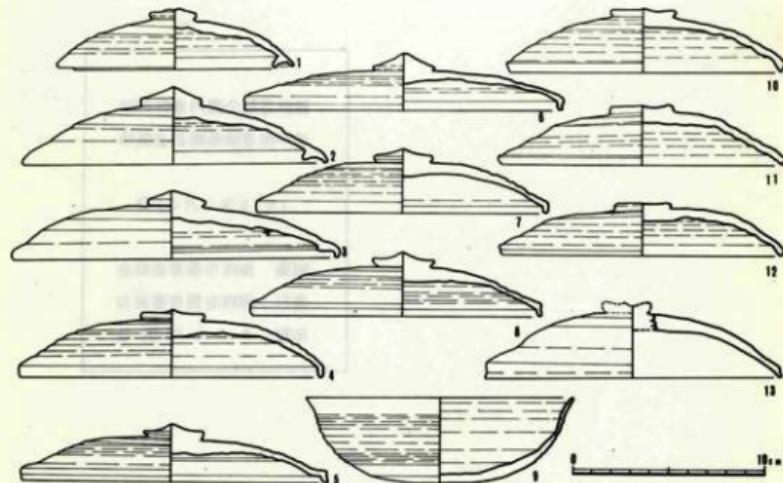
宝珠形のつまみを有し、口縁部内側に身受けがつく蓋(1~3)は下層から出土し、同じく宝珠形のつまみがつき、ロクロ形成のノタ目痕が残る蓋(4~8・10~13)は上層から出土している。碗状の坏身(9)は、下層の蓋とセットになる可能性がある。下層の須恵器は遠江の須恵器編年で古墳時代第Ⅳ期後半と考えられている土器である。上層の須恵器は奈良朝様式の土器である。この奈良朝様式の蓋類はつまみと口縁のつくりに差異がみられ、4~8と10~12に将来細分類されよう。他に割物の朱塗塊の破片が出土している。

以上のことから、山口遺跡は、水田下の遺跡の意味づけとⅣ期からⅤ期の土器編年するうえで重要な遺跡であると考える。

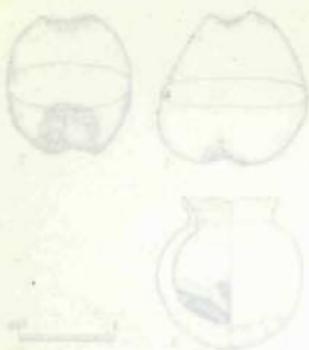
最後に、昭和53年度の轟バ事業についてふれておきたい。今年度は川尻地区(第16図7)と出入地区(第16図3の中央部)の2箇所実施された。川尻地区の雉子田遺跡(c)については、前項で報告したとおりである。出入地区では一畔見(d)と西ノ谷(e)の地点を調査した。一畔地点は、陶質土器数点出土したのみで遺構が発見されず、遺跡ではなかった。西ノ谷地点でも同様であった。



第18図 中村遺跡出土遺物



第19図 山口遺跡出土土器(鈴木敏則原図)



堆子田出雲點跡中、底と上縁

人子の下側斜面に施された模様は、心字形の内丸と外丸の組合せで、口輪部には「ハシゴ」と呼ばれる複数の横筋が並んでおり、内丸の底面には「足跡」の痕跡がある。また、内丸の底面には「足跡」の痕跡がある。

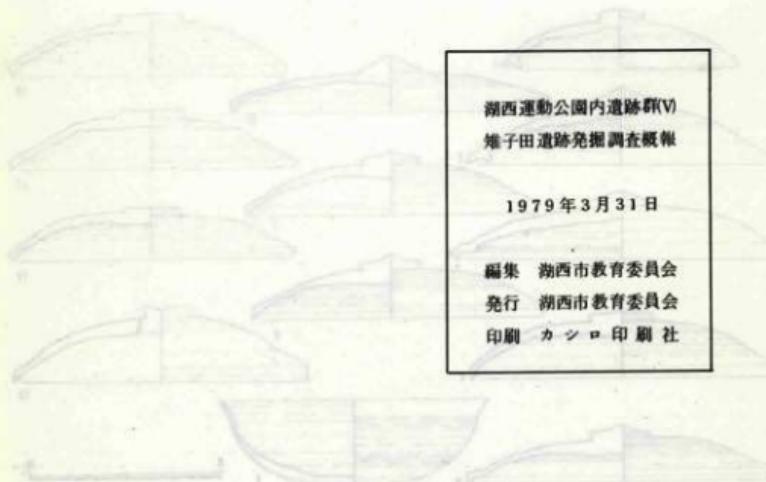
この出土物は、湖西運動公園内遺跡群の中でも最も重要な遺物である。その特徴は、底面に大きな穴があり、これは排水用の孔である。また、上縁には横筋があり、これは手縫いの跡である。手縫いの跡は、通常、縫合する際の針の跡である。この手縫いの跡は、通常、縫合する際の針の跡である。この手縫いの跡は、通常、縫合する際の針の跡である。

湖西運動公園内遺跡群の中でも最も重要な遺物である。その特徴は、底面に大きな穴があり、これは排水用の孔である。

湖西運動公園内遺跡群(V)
堆子田遺跡発掘調査概報

1979年3月31日

編集 湖西市教育委員会
発行 湖西市教育委員会
印刷 カシロ印刷社



図版 I 湖西運動公園内遺跡群



A. 遺構 F (工房址) (西から)



B. 遺構 G (住居跡) (南から)

図版2 湖西運動公園内遺跡群



A. 遺構G（住居跡）（西から）



B. 遺構H（北から）

図版3 雉子田遺跡



A. 遺跡近景（北から）



B. 溝状遺構（南から）

図版4 猪子田遺跡



A. 発掘区近景（北から）



B. 横出土状態（南から）

図版5 雉子田遺跡

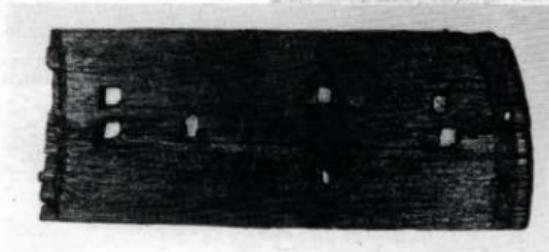


A. 井戸状遺構（西から）



B. 砧・洗濯板出土状態（西から）

図版 6 猪子田遺跡



正誤表

湖西運動公園内遺跡群(V)
雉子田遺跡発掘調査概報

頁	行	誤	正
4	9	西側丘陵	西側丘陵
10	33	D-7 地点東側	D-7 地点西側
10	33	D-8 地点南側	D-8 地点東側
13	21	器台 4.4 cm	器高 4.4 cm
13	31	D-7 地点東側	D-7 地点西側
17	第 10 図		縮尺 60 分の 1
21	第 14 図		縮尺 4 分の 1